
僕らの世界

永逢托都

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの世界

【Nコード】

N1103B

【作者名】

永逢托都

【あらすじ】

後ろ向きな二人は出会い、そして離れる。受験戦争の波に取り残され気味の雫夜、そして一人の少女。中学三年生の秋、二人の道が交差するとき、お互いの記憶の端で燦る真実が明らかになる・・・

ひとりひとり

喉まで出かかった言葉を必死に押しとどめて、
繋いだ手をそっと、離れた。

僕らは頼りない立ち位置で、明日を探しているはかない生き物たち
だった。

でもいつまでもこのままじゃられない。

狭苦しい世の中で、鬱屈とした毎日の中で、希望と呼べる光を見つ
けよう。

二人で歩いてちゃ見つからないものを。
新しい鮮やかな世界にしかないものを。

P S .

貴方はきっと、許してくれるんでしょうね。

もしかしたら今はもう、許してくれている？

でもまだ私は貴方に許される資格がないから。

もう少し、もう少しだけ、

私を許さないでください。

また少ししたら手紙を書きます。

お父様は今も変わらずお元気ですか？

私のことを聞かれたら、ただ元気だと伝えてください。

貴方も、お元気で。

また会いまじょうという言葉だけはいつも無く。

1× 壹夜の五年

五年前、母は死んでしまった。突然の交通事故だった。

交差点で反対車線を走っていた車が暴走し、母の運転する車に突っ込んだのだ。運転席へと、まっすぐに。

助手席には父が乗っていた。父はそれだけを僕に告げて、暫らくずっと泣いていた。すべては父が知っている。相手の車は、ペシャンコになりながらも逃げたらしい。

ペシャンコの運転席で、父が気付いたときにはもう母は息をしておかなかった。あまり苦しまないで逝けたのだろうと、骨になった母を見つめながら父は穏やかで泣きそうな微笑みを浮かべて言った。それだけが僕に告げられた。それだけで充分だった。

母がいなくなつた五年間、父は泣くだけ泣いた後、僕を育てることに奮闘してくれた。

あの日飲み会場所への送迎を母に頼み、死にたくなるぐらい後悔したのは父だ。

それでも酒に溺れることはなく逆に一切の酒を断ち、僕を一人で育てていくことを決意してくれた。五年の歳月で父はだいぶ立ち直つたと、僕は勝手に思っている。父は滅多に弱音を吐かないから。

父の覚悟が、僕は本当に嬉しかった。今でもずっと、感謝している。でも、僕は父のように立ち直つてはいなかったんだ。

僕の時間は、母がいなくなつたあの日で止まってしまった。

ぐっつきりと、僕の歩く人生の一本道が折れてしまったみたいなのだ。それからの僕の五年は、ひどくぼんやりとした日々になった。

ちなみに、このことを父に話したことはない。

僕のこの希薄な日々のは。

とてもじゃないけれど、言えそうにない。

そうこうしているうちに、僕は中学三年生になった。
周りはみんな、受験に全力を注いでいた。

2 × 現在進行

かりかり。かりかりかり。

夏休み前までは明らかにその気じゃなかった鉛筆の音たちは、冬の気配が近づく頃にはまるで熱を帯びたように強く、真剣さを帯びている。

教室の中は暖房の稼働音と鉛筆の音だけが延々と続いていて、人の声がまるでしない。夏休み前までは、早く授業終わらないかなああ早く夏休みが来てほしい。そんな言葉ばかりが飛び交っていたというのに。

それはまるで別世界の光景だった。ここにいる自分がひどく場違いな気がしてしまう。

それでも高梨壱夜はなお、皆が思い思いに写し取っている黒板の英文をぼんやりと眺めながら、ちょこんとその場に収まって放課後の安息期を待っていた。

クラスメイトの勉強への意欲が、壱夜には遠かった。

お前って何にでも無関心だよな、いつも。

もうすっかり言われ慣れてしまった言葉だ。

無関心、無頓着。

お前のやる気って何なんだ。

何でいつもお前ってそうなんだ。

母が死んだあの日から、自分の何処かがばきりと折れて、未だ方向修正はされていない。

物語やブラウン管の中の主人公たちは、そこで

「これからはこの悲しみを胸に抱いて前向きに生きていこう」

なんて言うんだろうけど、とてもじゃないがそんな気分になれたことは一度もなかった。

そのばかりと折れた部分が、虚しく空いた心の隙間が、まだうまく消化しきれていないのだ。そこには上手く飲み下せずに喉につつかえたままの部分が確かに存在するのだ。

母を殺したのは誰だったんだろう。

これだけは未だ、誰も教えてくれない。

壱夜にとっては唯一の生き証人といえる父ですら、固く口を閉ざしている。

母を殺したそいつを確かに恨んではいる。

だが対象がはつきりしない憎悪を抱き続けることほど虚しいことはない。

どこまでも、形のない凶悪を恨み続けることの果てしなさ。それで母が死んだという事実が変わるわけでもないのに。

だから、虚しい。

本当はそんな得体の知れない殺人鬼など気にせず生きていけるはずだったのに。

母が死んですぐに事故の様子を聞いたときは殺した相手が誰かなんて知らなくても十分だなどと思ってみせたくせに。

いつのまにか壱夜にとって、今唯一マトモに執着していることになっていた。

もしもその真相に近付けたとき、ゆっくりとでも確実に、壱夜の中の「何か」

は変わるだろう。

そんな未来形の想いを抱きながら、

壱夜は今日もぼんやりと時間を消費する。

3 × 現在進行・2

放課後はゆっくりと、穏やかにやってきた。

壱夜は川の土手の上を歩いてた。夕日に向かって歩くのは、目に痛い。でも一応通学路として記入したごみごみとした住宅地帯よりも、こっちのほうが断然歩きやすい。静かだし、少しだけ近道だし。

空気も澄んでいるとあれば、選ばない理由がなかった。

途中、野球部や陸上部のランニング集団と擦れ違うのが、少しだけ億劫だったが。

時間は午後四時を少し過ぎた頃、彼らは壱夜がこんな時間に家路を辿っていることに対して、非難と嫉妬の入り混じった目を向けてくる。俺も帰りたいだとか大抵は愚痴を視線に込めたようなものだった。

壱夜は学校で幽霊部員が一番多い剣道部に一応所属していて、きつと永遠に正式部名にはなれない帰宅部の一員だった。別に剣道が嫌だとかそういう問題ではなくて、ただ単に部活動という行為自体にやる気を出せなかったからだった。中学校生活の中で、部活に顔を出したのは一度もない。

人に部活をしないで帰るのかお前は、なんて視線を向けながらも、あんたたちはそれでも部活にエネルギーを使えてるじゃないか。

それが壱夜には羨ましく思えたりもする。

何かに激しく心動かされたことも、あれから一度だって、ない。

ランニング集団が通り過ぎ、壱夜の周りには静けさが戻ってきた。ぼんやりとやや前方を見つめながら歩く壱夜の目に、土手沿いの

草むらに寝そべる人の姿が見えてくる。この土手は散歩に来る犬が多く、何処に何があるか分かったもんじゃないので、そういうことを堂々とやってのける人間はまずいない。今日の前にいるのだけど前進し、もう少し近づいてみると、その人物は同じ中学の制服を着ていることが分かった。

学生服ではなく、紺のセーラー服に紅いリボン、プリーツスカートを風に靡かせている。

ああ、女かと、遅まきながら理解する。

それは、壹夜が柚木雨梨を認識した瞬間となった。

4 × 現在進行・3

柚木雨梨、通称アマリリス。

別に花言葉みたく「おしゃべり」な性格なのではなくそれどころか正反対で、

ただ「アマリ」という名前の響きからそんなあだ名が付いたらしい。

どちらかというと、

性格や雰囲気には同類らしい。

だからと言って晝夜が柚木雨梨なる人物に積極的なアプローチな
どしたことがなくそもそもしたくもなかったわけだが、

妙にその変わった名前とあだ名が印象に残る少女だった。

何もかもの中に色恋沙汰も含まれているほど異性に興味が無い晝
夜にとっては珍しく希少な存在であり、

まあここでわざわざその旨を目の前にいる本人に伝える気はなかつたが、これがあの時騒がれていた柚木雨梨なる人物なんだと胸中で静かに納得していた。

あの時。

以前柚木雨梨は、学校という環境の中で自分と同じく空気のような存在感を放っていた（と言われていた）のに、学年一有名な不良系の男に好かれていた。もしかしたら今も、彼女はその男に好かれているのかもしれないが、その後の経過を耳にしたことはないの
そこはよく分からない。

不良系の男と同じクラスである晝夜は、そいつの口から柚木雨梨という同年代女子の存在を知った。

その時はただぼんやりと、そいつの不思議な好みを聞き流していたのだったが。

まあ顔は整っているほうなのかな・・・と、壱夜は初めて柚木雨梨の顔をまじまじと見つつ、そんな感想を抱いた。不良系の男の話によれば根暗系という失礼な名前の分類に彼女を勝手に入れているはずなのに、それは他の学生という名のライバルに彼女を印象付けないための作戦だったのかもしれない。

肩までの黒髪を片手で少し摘んで弄びながら、柚木雨梨は華美ではなく小奇麗に整った容貌を空にぼんやりと向けていた。

いつの間にか立ち止まって彼女の動きを見つめていたことに気づき、このままじろじろと見ているのもなんだか失礼かと思えてきた。そろそろ立ち去ろう、そう思い足を動かした矢先、

ふっと柚木雨梨が俊敏な動作で身体を起こし、ぐるりと振り返ってこちらを見てきた。

一瞬かちりと視線が合ったのを感じる。

そこから先の彼女の動きはあつという間だった。

壱夜が呆然としているなか、

柚木雨梨は一瞬だけ苦虫を噛み潰したような表情を浮かべすぐに視線を外し、

立ち上がりながら鞆を掴むと壱夜に背を向けて走り出した。

「待つ・・・」

反射的に声を掛けてみたものの、一向に柚木雨梨は立ち止まる気配がなく、

その背中はあるという間に小さくなっていった。

残ったのは飲み下せない不思議な感情だった。

「何だよ。あれ」

思わず気持ちが言葉になって出てきた。

まったく、こっちが苦虫を噛み潰したい気分だった。

5×理解不能

昼休み中にも一部の生徒の参考書を開く手が止まらないこの教室の中で、

とても珍しいことが起こっていた。

長閑さと焦りと、その他諸々を内包した昼休みを比較的穏やかに過ごしていた筈の教室の空気は、異様にピリピリと張りつめていた。おしゃべりに花を咲かせていた者たちの会話が途切れ、

参考書に全神経を集中させていた筈の者の手すら止まっていた。

四方八方からの声なき視線が、痛いほど僕と僕の目の前にいる人物に注がれていることが分かる。

半分は好奇、半分は一触即発の空気への畏怖。

全く以て意味が分からない。

どうして僕が注目されなくちゃいけないんだ？

よりによつて、なんで僕がわざわざ他人の反感を買いに行かなければいけないのだろう。

現実の僕はそんな気さえ起きないのに。

嫌われることも好かれることも、どうだっていいのに。

だからこれは何かの勘違いだ。

それを言葉にして語ることとはできないから、胸中で呟くしかないのだけだ。

そうやって人の視界を塞がないでくれ。

名前をいまいち思い出せないんだけど、同じクラスだってことは分かる、

「どうして俺がお前んとこ来たのか、アテぐらいあるだろ？」

そこの不良系の君。

僕に教えてくれ。

この状況を作り出した理由を教えてください。

「無さすぎて困るくらい、なんだけど」

恐る恐る答えてから、はっとしてしまった。

―不良系？

（ちよつと、待った）

そのフリーズに、意識の深みに沈んでいた何かが引き上げられたような気がした。

よりにもよって、

思い出したくもない、

何かが。

「おいおい俺は聞いたぜ？お前が昨日、帰りにあの“アマリリス”と会ってたって」

「・・・は？」

ひどく間の抜けた言葉が音になって飛び出してきた。

出来ることならこいつの目の前で頭を抱えてやりたかった。

そんなことをこの男に吹き込んだ奴を探して一発殴ってやりたくもなかった。

そしてあの女にも一発、何かがつんと言ってやりたい。

なんである“アマリリス”に繋がる人間が、

僕の穏やかな日常を壊しにやって来るんだ。

どうしてわけもなく一睨みされただけのこの僕が、

あの女に代わってこいつに何かを弁解しなければいけないんだ。

どうしてあの“アマリリス”に関ってしまうと、

僕は嫌な気分になってしまうものなんだか。

出来ることなら自分で考える前に、

誰かに教えてもらいたい気分だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1103b/>

僕らの世界

2010年10月17日03時17分発行